

## 〈報告〉

柔道「投の形」の評価に関する研究  
—評価の類似性と観点について—金持 拓身<sup>\*;\*\*</sup>・菅波 盛雄<sup>\*\*</sup>A study on the evaluation of the judo “NAGE NO KATA”  
—About similarities and viewpoints of the evaluation—Takumi KANEMOCHI<sup>\*;\*\*</sup> and Morio SUGANAMI<sup>\*\*</sup>

## 1. 緒 言

日本伝講道館柔道(以下,柔道とする)では,元来,「形」と「乱取」による修行を両軸としてきた。「形」修行は,技術の定型,規範を学び,技の効果を高めるねらいがあり,技の理合いを身につけるには最も良い方法であるとされていた。しかし,競技的面を打ち出し国内外に普及を進めてきた柔道は,より実践的な修行方法である「乱取」が重視されるようになった。その結果,柔道の試合の中で技が多様化し,柔道技の特性が失われつつあると懸念されるようになった<sup>3)</sup>。そこで,柔道では,「形」の競技化が進められ,全日本柔道「形」競技大会をはじめ,講道館国際柔道「形」国際競技大会,IJF柔道「形」ワールドカップなど全世界的に「形」競技大会が開催されるまでに至った。しかし,現在のところ「形」に関しては,審査規定,採点規則などはなく,技能評価法は暫定的な状態にある。「形」競技実施上の主要課題は,技能評価法の整備であるといわれている<sup>2)</sup>ものの,「形」の評価法について検討された例はない。そこで,本研究では柔道「投の形」

の評価について,審査員間の類似性を検討すること,審査員の評価の観点を明らかにすることにより,今後の柔道「投の形」の技能評価に資することを目的とし,調査,研究を行った。

## 2. 方 法

柔道「投の形」の1技ごとに対し,7件法で13項目(観点別評価12項目,総合評価項目)の評価を行うというかたちをとった。評価の対象とする13項目については,全日本「形」競技大会の大会要項「審査基準と評価の観点」<sup>3)</sup>などの中から技の評価に相当する項目を複数の柔道高段者が協議し,抜き出した。調査対象としては,全日本「形」競技大会やそれに準ずる大会,および昇段審査などで「投の形」の審査経験を有する22名の柔道高段者を対象者(以下,評価者とする)とした。対象者の基本属性(平均±標準偏差)は,年齢 $52.27 \pm 7.67$ 歳,指導歴 $28.32 \pm 10.15$ 年,段位は五段以上(最高八段)であった。

また,「形」の演技には,平成17年度関東「形」競技大会,「投の形」の部,において優秀選手として選ばれた柔道「形」競技者の組(A組とする)と「投の形」の講習を受講済みの大学生柔道競技者の組(B組とする)が演じた。対象の技として,手技・「浮落」,腰技・「釣込腰」,足技・「送足払」,真捨身

\* 桐朋高校

Toho High School

\*\* 順天堂大学院スポーツ健康科学研究科

Graduate School of Health and Sports Science,  
Juntendo University

技・「巴投」, 横捨身技・「横掛」を選んだ。技の選択にあたっては乱数表を用い, 手技, 腰技, 足技, 捨身技, 横捨身の技の種類ごとに1技を選択した。また, 映像を作成する際にも乱数表を用いて, 無作為に技の順番を決めた。

分析にあたっては, 回収したデータの基本統計量を算出した後, 相関分析, 回帰分析, 数量化Ⅳ類などによる分析などを行い, その特性を検討した。

### 3. 結 果

A組とB組の評価を比較すると, 全ての技の全項目においてA組の演技に高い評価が与えられた(有意水準 $P < 0.05$ )。

22名の評価者間の評価の類似性を数量化Ⅳ類により分析した結果, 全ての技の評価に高い類似性が認められた(全ての技で相関係数 $r^2 = 0.50$ 以上)。ここでいう類似性とは, 同一の評価を与えた項目数の多さを指すものとする。

観点別評価12項目の中から評価者に「重視する」項目を調査した結果, 「正確な動作」, 「技の理合い」, 「基本動作」の3項目は特に重視されていることが分かった。また, 「1番目に重視する」項目は上記3項目に共通していたが, 「2番目…」, 「3番目…」となると分散する傾向にあった。

さらに, 評価者それぞれが「1~3番目に重視する」と答えた3項目の評価を抜き出し, 「総合評価」との関連性をみると, 重相関係数0.9458と高い相関がみられた。また, 「1番目に重視する」項目の評価のみを抜き出した場合では, 重相関係数0.9282であった。

### 4. 考 察

A組, B組の評価は, 全ての評価者が一様にA組に高い評価を与えた。評価者は, A, B組の技能差を的確に評価したと思われる。

22名の評価者間の評価には高い類似性がみられた。「投の形」評価のルールはいまだ確立されていないといわれるが, 結果的にはかなりの程度の共通認識に立脚して評価が行われているものと考えられる。

評価者それぞれに「重視する」観点が存在しており, 特に「正確な動作」, 「技の理合い」, 「基本動作」などが重視される傾向にあることがわかった。これらに項目が共通認識となっているものでないかと思われる。

また, 評価者が「重視する」3項目程度で全体の評価が決められているものと考えられる。

### 5. 結 論

評価者は, 2組の演技者の演技の巧拙を的確に見抜いており, 評価者間で評価に類似性が見られた。評価者間ではある共通認識が持たれているものと思われ, それは「重視する」項目などの共通項目で説明ができる。また, 評価者が「重視する」3項目程度の観点から「総合評価」が決められていることが示唆された。

(当論文は, 平成20年度順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科の修士論文を基に作成されたものである)

### 文 献

- 1) 村田直樹: 全日本柔道「形」競技大会(第二回), 「柔道」. 11月号, 17-23, 講道館, (1998)
- 2) 村田直樹, 藤堂良明: 形の技能評価原論, 武道学研究. 第40巻第2号, 11-21, 講道館, (2007)
- 3) 佐々木武人, 柏崎克彦, 藤堂良明: 現代柔道論 国際化時代の柔道を考える. 16-20, 大修館書店, (1993)

(平成21年3月31日 受付)  
(平成21年3月31日 受理)